

「韓国からの依頼

金君子さんのケース

2000.7.10

VAWW-NET Japan 調査チーム金富子調査

報告が遅れましたが、以下は、6月末現在の金君子さんに関する調査報告である。

<判明した事実>

- 1) 金君子さんが「満州」にいった時期が、1942年なのか1943年なのかは不明であるが、琿春に駐留していた軍隊名は、1942年5月を境に「琿春駐屯隊」から「第71師団」に新編になった。即ち、1942年5月前に金さんが琿春に行った場合は「琿春駐屯隊」

1942年5月以降に琿春にいった場合は「第71師団」ということになる。

- 2) 公文書類はいまのところ出ていない。また「キンカク慰安所」に関する資料は出ていないが、琿春の慰安所に関しては、日本軍兵士島本重三による具体的な証言が出ているので、同封したのでそれを参考にしてほしい。▲また、琿春の慰安所に関しては、尹貞玉先生や西野瑠美子さんが旧「満州」を調査した記録集『ピース・ジャーナル』にも目撃者の証言が出ている。▲また、写真も多数ある。▲地図も同封する（出典はいま西野さんに調べてもらっている）。

- 3) 地名の「 」は、琿春の近くにある旧ソ連との国境沿いにある「五家子」（「ごかし」と読むと思われる）である可能性が高い。五家子はソ連との国境に近接した重要な国境陣地で「第9国境守備隊」が置かれていた。国境陣地にも慰安所があったという日本軍兵士の証言もある。金さんは「軍人たちが前線に出たので、（琿春から） に移動した」と証言しているが、琿春に駐屯していた第71師団が台湾に転出したのは正式には1945年1月である。転出直後の1945年2月に五家子の「第9国境守備隊」は、「第127師団」に再編された。『戦史叢書』敗戦まで五家子を守備し、敗戦時に激しくソ連軍と闘ったという。金さんは、この頃五家子に行かされた可能性が高いと推測されるが、被害証言では連行時期が不明確なので、再度確かめる必要がある。

<再インタビューしてほしい内容>

- 1, 同封した「琿春の地図」を示しながら、金さんがいた慰安所の周りの様子を再度きいてほしい。川が近くにあったかどうか、近くの慰安所の様子など。
- 2, 挺身隊研究所『証言集』では、17歳（1942年）」と出ていた。また琿春に1年半、五家子に1年半」それぞれ慰安所にいたことになっているが、そうすると第71師団の南方転出の時期と合わない。琿春に行った時期は、1943年であった可能性は？
- 3, 「 」に行った季節を聞いてほしい。夏だったのか、冬だったのか＝雪が降って寒かったとかが重要である。
- 4, 敗戦時の日本軍の様子、ソ連兵が来たのかどうか、を聞いてほしい。

以上を、マニラ会議まで再調査してくださると助かります。

よろしくお願いします。

金 富子

1. 個別の被害事実＝金君子さんの証言

1) 概略

▲1926 年江原道平昌生まれ。妹二人。父は両班、母は 26 歳年下。学校にはいけなかった（ほかの兄弟も）。本家の次男を養子に。10 歳時父死亡。

▲1942 年 3 月、17 歳時に「軍属のような朝鮮人男性」により中国東北部・琿春にあるキンカク慰安所。1 年半後、コカシ（→五家子と思われる）慰安所へ移動。村落はなく部隊のみあった。源氏名「金本君子」。敗戦を知らされず徒歩で帰郷（出典：『証言集Ⅲ』）

以上を詳しくみると、

2) 詳しくみると…

1) 連行時の様子

①証言「1942 年 3 月 江原道鉄原の養父の家、17 歳のとき、軍服をきた朝鮮人男性により連行「お使いに出された」→汽車（貨物車）に乗車、戦闘帽をかぶった朝鮮人男性につれられた 8 人の少女。汽車には軍人。」

2) 琿春の「キンカク慰安所」

①証言「トラックで軍人・少女たちと琿春の慰安所「キンカク慰安所」＝「昔の旅館」のような建物。先に 9 人の少女たちがいたので全部で 17 人。主人夫婦＋男性（朝鮮人）。1・2 階＝9 部屋×2。1 年半位滞在。」

「◆平日は兵士は来ず、夜に将校。土曜午後から軍人、日曜は朝 9 時～7 時まで将校引率で兵隊。多いときで 40 人ぐらい。

◇最初の相手は将校、抵抗したので殴られ、右耳鼓膜が破れ、いまでも聞こえない。

◇毎週金曜は軍人のトラックで検査所に行き軍医による性病検査。サックをしない軍人。梅毒羅病→606 注射。流産経験（相手は陸軍曹長？）

◇代金はなし。主人は「きみこ」「9 番」と呼ぶ。朝鮮人だけのときは、朝鮮語。」

2. 金君子さんの被害に対応する加害軍隊について判明している事実

①1941 年「関特演」直後の主要戦闘部隊「関東軍（2）：24-25」

関東軍直轄 師団 5（10.14.28.29.51） 琿春駐屯隊 9 国境守備隊
7 独立守備隊（第 10 師団指揮下） 10 迫撃大隊 野重 2、10
18 連隊 牡丹江重連 戦車 7、8.23 連隊 ほか略

②1942 年 3 月当時の関東軍＝「軍容の刷新」の時期

1942 年 3.16 「関東軍作戦準備要綱」を上奏裁可→関東軍に訓令

これにより関東軍は中央の指示・予算によって長期的目標のもとに作戦準備。

6.6 陸軍省部、戦況の推移に応じつつ兵備の整頓と対北方戦備を目標とする「軍容の刷新」を計画し、国軍軍容刷新要綱を陸相、参謀総長列立上奏＝在南方兵力を大幅に整理し、満州と内地の兵備を強化することが中心。

第一方面軍司令部新設（牡丹江）＝山下奉文中将。4 コ軍をもって東正面主攻勢を担当。

[(2)：106-107] [110]

第 2 軍（延吉）新設（司令官：上月良夫中将、前第 19 師団長、のち朝鮮軍司令官）

＝骨幹兵団は隷下常駐の第 71 師団新設（琿春駐屯隊を母胎として 5 月新編）。

（師団長：遠山登中将－○）

第9国境守備隊1「五家子(琿春南東18軒=km)」, [(2) 169-170]

有事の際は、北朝鮮羅南在住の第19師団を合わせてバラバシに向かい急襲の任務。

→その後第19師団はバラバシ攻略から除かれ、第23師団に編入予定? [同171]

関東軍「兵員65万名、戦車675両、装甲車155両、飛行機750機」

=「前後を通じて最も充実した」時期 [中山: 234]

※ 関東軍の兵站業務=第一課兵站班(長=中佐、参謀3~4名、部付き将校若干)が掌握
くわしくは [(2): 108]

■第71師団について:「命(みこと) 1942年4月16日 旭川 歩87.88.140 満州→台湾

42年8月からはじまったガダルカナル島攻防戦で米軍に敗北したあと、戦局は日本軍の敗勢へ。

9月 関東軍から航空部隊と一部の地上部隊の抽出転用の開始、「関東軍の地位はしだいに
総後衛的立場へと変質」[中山234-235]

1943年 10.26 第2軍司令部を抽出し、南東及び濠北への転出 [(2): 248-249]

③琿春の慰安所跡

■西野さんによる琿春の地図=別紙参照

■陶土元さんの証言=琿春旧市街にある日本人女性の慰安所あと=「高砂楼」「山水楼」「大福楼」
「矢島亭」「水月楼」の名。(戦争を考える会『ピースジャーナル』No10、1992年: 25頁)

④琿春の朝鮮人「慰安婦」に関する証言

■島本重三: 1943年~2年間、「第733部隊の工兵一等兵として満州国間島省琿春に駐屯」兵隊の外出も二人以上で行動、単独で指定された場所以外への立入は禁止→「許可された場所はこの町にただ一つの映画館と軍慰安所」。初めての外出の朝、「慰安所に行くものは割引券を渡すから申し出よ。サックは必ず携行すること。一回使用したサックを裏返して使用してはいかん。そのつど新しいものを使うこと。帰営後は直ちに医務室に行って洗浄をうけよ。禁止区域に行ったら性病をもらったものは営倉を覚悟しておけ」と曹長のくどくどしい達し。慰安所には“ピー屋”といわれ、朝鮮の女たちは“朝鮮ピー”と兵隊からよばれていた。将校や下士官には兵隊用とちがう高級な場所があり、そこには“日本ピー”といわれる日本の若い女が肉体を提供していた。兵隊専用のピー屋は琿春の町に五軒散在していた。一軒の店に十人ほどの女がいた。」「兵隊サン、オトコニナリナサイ」。朝鮮の女たちハ道ばたに出て兵隊を呼びこんでいた。まだ若い顔の女もまじっていた。兵隊の慰問のために働くのは立派なことでもその上に金をもうけられると誘われ、遠いところまで連れてこられた。気がついたときは帰るにも帰れず、彼女らは植えた兵隊の餌食として身を投げださねばならなかった。日曜日にはけだものとなった兵隊を相手に少しも休むまもなかった。まだ終わらないうちから次の兵隊が戸を叩いてせかした。ベニア板板張りの小さな部屋には、貧弱な鏡台とトランクがあった。それが彼女の全財産であった。せんべい布団を被ううす汚れた敷布には、解剖台のような気味の悪い血がしみついていて、整理とのときも休むことを許されず、働かなければならなかった。…なかには自殺するものもあった。その後、私たち駐屯部隊の大半は敗色濃いマリアナ方面に送られたので、慰安婦の最後についてなにもすることはできない(大阪市・療養者・58歳)戦争体験を記録する会『私たちと戦争2-戦争体験文集』1977

■孫学雲さん「昔は平屋の家ばかりでしたが、慰安所だけは2階建てでした。・・・女性たちは朝

鮮の服(チマ・チョゴリ)を着ていました。」■陶土元さん＝「(琿春川の)川沿いにならんでいた朝鮮人の家が慰安所で、2、30軒くらいありました」(『ピース・ジャーナル』)

→「慰安所で使われていたと見られるオンドル式の寝室」がそのまま残る(同上:47)
写真あり＝西野氏所有

⑤軍と慰安所の関係に関する証言(砲兵司令部書記官＝当時73歳) 「八面通の駐屯司令部」「恤兵慰問部で執務として働いた元兵士「慰安所を開設するにあたっては「慰安所就業申請書類」を司令部に届け出、「慰安婦」就業時も司令官の許可必要。＝本人の写真、氏名や経歴、朝鮮の本籍。年齢はほとんどが17～18歳。毎月「月報」を部隊に提出→部隊は年に一回、司令部に提出。月報には「慰安婦の1ヶ月ごとの成績、給料の明細等、下には楼主と慰安婦の認め印が捺印」。軍人が行ってよいのは、「軍が指定した朝鮮人、日本人の経営する慰安所だけ」『従軍慰安婦110番』52-53頁。

⑥考察:したがって、金さんが「慰安婦」にさせられた1942年3月頃の琿春には、関東軍(司令官:梅津美治郎大将)直轄の「琿春駐屯隊」が駐屯していたが、戦況の推移に応じつつ兵備の整頓と対北方戦備を目標とする「軍容刷新計画」(6月6日裁可)によって地上兵力の大幅な改編が行われた(関東軍司令部も総司令部に改称)。琿春に関係する軍編成をみると、四〇軍をもって東正面主攻勢を担当する第1方面軍司令部が牡丹江に新設(司令官:山下奉文中将)され、その隷下に第2軍(延吉)(司令官:上月良夫中将、前第19師団長、のち朝鮮軍司令官)新設された。その第二軍の骨幹兵团となったのが、琿春駐屯隊を母胎に五月に新編された「第71師団」(軍令陸甲第34号で編成、5月16日大陸命第630号で編入[(2)](師団長:遠山登中将—○))である。ほかに、のちに金さんが行かされることになる第9国境守備隊1[五家子(琿春南東18軒＝km)]、その他の軍直部隊も隷下に有した。金さんが「慰安婦」にされた同時期である1942年から2年間、満州国間島省琿春に駐屯していた第733部隊の工兵一等兵であった島本重三は、琿春に朝鮮人「慰安婦」を有する慰安所が5軒あったと証言している。また、孫学雲さん「昔は平屋の家ばかりでしたが、慰安所だけは2階建てでした。・・・女性たちは朝鮮の服(チマ・チョゴリ)を着ていました。」陶土元さん＝「(琿春川の)川沿いにならんでいた朝鮮人の家が慰安所で、2、30軒くらいありました」(同上)という当時、琿春に居住していた方の証言からも、慰安所の存在は確認できる。→「キンカク」慰安所はわからず。

3) コカシ(→五家子とおもわれる)の慰安所で

①証言:1年半後＝1943年末か1944年初頭?、軍人たちが前線に出たので、トラックで「コカシ」→五家子へ移動。個人用の住宅に7人入る。五家子には村がなくずっと平原。性病検査はトラックに乗って他の部隊へ。軍人は土日だけ来る。外出はできず。1年半弱滞在。

②次々に南方に抽出される関東軍の師団と五家子に新設された第127師団

1943年 10.26 第2軍司令部を抽出し、南東及び濠北への転出[(2):248-249]

1944年 7.18 関東軍総司令官梅津美治郎大将→参謀総長に就任

後任の関東軍総司令官に山田乙三大将

1945年 1月25日 第71師団、台湾(第10方面軍)へ転出[(2):268]

2月 第127師団（第9国境守備隊（五家子）を充当して編成）」を新設 [同272]

→三月末まで、開戦時に「満州」に駐屯していた13個師団はすべて消える。この間、関東軍は在満部隊の改編や抽出された師団残部を基幹に14師団（うち3個師団は朝鮮半島南部に転出）を編成、さらに五月には中国戦線から四個師団、朝鮮半島から1個師団編入。→次に「根こそぎ動員」はじまる

■第127師団について： 1945.3.20 宇都宮 東満州 歩280.281.282

③関東軍の築城部隊に所属した元兵士の慰安所に関する証言：

「1937年から1944年までソ連との国境地帯を転々。築城部隊とはトーチカを造る仕事ですが、私は慰安所も建てました。一部屋は3畳ほどの広さで板張りでした。料金は1円50銭ぐらいでした。一人が一日に50人ぐらいの兵隊の相手をしていました。大勢並んでしますから、一人せいぜい2、3分です。日曜日にあまり殺到するので、他の曜日は、各部隊で相談して割り振りました。・・・朝鮮人慰安婦たちは兵隊の洗濯女という募集を見て来たということでした。だまされたと話していたのを覚えています。関東軍の御用商人が、慰安婦を斡旋していたようです。・・・国境地帯は大変寒さの厳しいところです。・・・（忘れられないのは）死亡した慰安婦がオオカミに食べられたことです」『従軍慰安婦110番』（39-40頁）

④考察と疑問：金さんの証言にある「軍人たちが前線に出たので、（琿春から慰安所を）トラックでコカシに移動した」というのは、敗色が濃くなる中で関東軍師団が次々と南方に転出したことを指すと思われる。琿春にいた第71師団が台湾（第10方面軍）に転出したのは、正式には1945年1月25日「（2）：268」であり、転出直後の2月には、五家子にある第9国境守備隊を充当して編成第127師団が新設 [同272] されているのである。従って、金さんが行かされた「コカシ」とは、五家子を指すのは間違いなしと思われる。琿春から南東に18km先（60kmとも）にある五家子は、ソ連との国境に近接した重要な国境陣地であった（地図参照）。そもそも国境陣地は、ソ連のトーチカ陣地構築に対抗するため1934年6月頃からはじめられた（第1期～第3期）。五家子には現地部隊（琿春駐屯隊）が堅固な野戦陣地が設けられていたが、琿春方面に予想されるソ連の侵攻を拒止するために、第二期工事により国境の稜線上に構築され1939年末までにほぼ完成した。陣地守備隊の兵力編成は通常「通常一コ大隊」を編成したが、五家子では「歩兵四中队、砲兵〔野（山）砲〕二中队、工兵一中隊であった（1939年末当時）。国境陣地は徹底した秘匿が要求されたという [以上、（1）200-213]。五家子には1939年末以来「第9国境守備隊」が配備していたが、1945年2月にはこれを土台に第127師団に編成されたのである。金さんの証言である「コカシには村がなくずっと平原」というのは、五家子が人工的につくられた国境陣地であったためであると思われる。そして、そのような国境地帯にも慰安所があったのは、上記の「満州」の国境地帯を転々とし築城部隊に所属していた日本軍兵士の証言によって、明らかである。この兵士は「慰安所」建設まで証言し、日曜日に兵士が慰安所に殺到する様子は、金さんの証言と符号する。

金さんの証言→「性病検査はトラックに乗って他の部隊へ。軍人は土日だけ来る。外出はできず。1年半弱滞在。」??

＜疑問点＞証言の「慰安所移動時期」と、前線に転出した71師団の時期があわない。

4) 敗戦時の様子

①証言「解放」わからず。男性が「好きなようにしろ」。無一文で他の「慰安婦」7人と慰安所を出て、白頭山、豆頭江を渡り、会寧へ。会寧から一人で乞食同然で鉄原へ。

②＜ソ連進攻当時の関東軍編成＞

第一方面軍 第3軍:師団4 (79.112.127.128) [(2):390、地図421]
第5軍
関東軍総司令部 第三方面軍 第30軍
第44軍
直轄部隊 第4軍
第34軍

■五家子陣地（元第9国境守備隊陣地）の敗戦までの戦闘

「第3軍第127師団歩兵第280連隊が警備中、8月8日夜半、敵重砲の集中射撃をうけ、無線機を破壊され、じれ孤立の戦闘を続け、8月19日まで抗戦した。損害は戦死約30名、行方不明約100名」[(2):481]

←「東・北・西北における国境線付近に於ける季節陣地（永久及び堅固な野戦築城陣地）に存知された警備部隊は、大は師旅団から、小は小隊に至るまで、大部分はソ軍の侵攻に当たって現地固守を命じられた」[同上:480]

＜敗戦時の指揮命令系統＞

関東軍総司令官 山田乙三大将
総参謀長 秦彦三郎 中将
(第4課参謀 原善四郎)
↓
第3軍司令官 村上啓作中将
同 参謀長池谷半次郎少将
↓
第127師団 古賀龍太郎中将
↓
歩兵第280連隊 ?